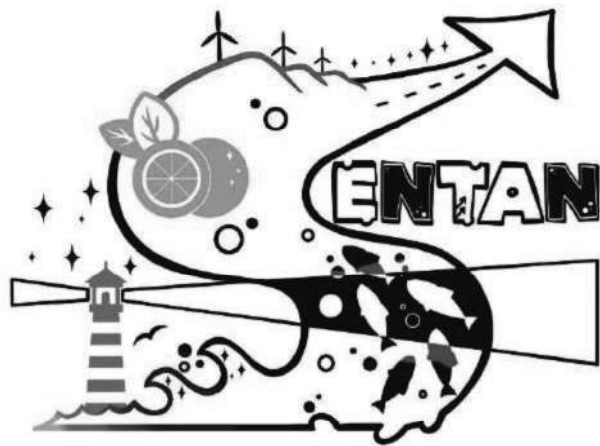


## V 關係資料





地域再生大賞

## 候補に50団体

### 三崎高(伊方)も

地方新聞46紙と共同通信社が地域活性化の取り組みを表彰する本年度の地域再生大賞は、第1次選考を通過した全都道府県の50団体が15日までにそろった。来年1月29日に大賞など各賞を発表し、2月に表彰する。目標年まで10年を切った国連の持続可能な開発目標(SDGs)に注目し、副題は「未来へつなぐ、みんなだ」。

50団体は各紙や共同通信が選んだ。持続可能なまちづくりや次世代の育成、困窮者支援など多彩な活動を展開する。若者やお年寄り、障害のある人など担い手も多様だ。環境問題などSDGsに関連する活動も目立つ。

愛媛からは、伊方町内で防波堤アートを描くなどまちおこしに取り組む三崎高校「せんたん部」が選ばれた。

今後、有識者の選考委員会が新規性や地域住民とのつながり、発展性といった

点から審査。今回は「地域からのSDGs」という視点から貧困の廃絶、ジェンダー平等、環境保全など国連が掲げる17目標との関連も考慮する。大賞(副賞100万円)、準大賞(30万円)、地方ブロック賞(各10万円)などを贈る。

新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ、前回同様に東京での表彰式開催を見送り、各地で個別表彰する。大賞は2010年度から毎年度実施。昨年度の第11回までの表彰数は延べ550を数えた。

2021年10月16日付 愛媛新聞

## 特産品で活性化

### 三崎高が特別賞

政府「農山漁村の宝」

政府の有識者懇談会は19日、独自の特産品や文化を生かして地域活性化に取り組む優良事例「ディスプレイ農山漁村の宝」の最優秀賞に当たるグランプリに「一般社団法人三重県障がい者就農促進協議会」（三重県津市）を選んだ。同協議会

は就農を通じ障害者などの社会参加を後押しする「農福連携」を推進している。優秀賞や特別賞もあり、

県内からは三崎高校「せんたんプロジェクト」（伊方町）が特別賞に選ばれた。

政府は「農山漁村の宝」を「むらのたから」と呼び、選定した団体や個人の活動をホームページなどで紹介している。8回目の今年は全国から651の応募があった。

# 門本さん(愛媛大)最優秀

地域課題の解決に向け、  
学生が考案したビジネスプランを競う「EGFキャンパスアワード2021-2

地域課題解決ビジネスプラン  
捕獲イノシシの革製品化



学生が考案したビジネスプランの審査で最優秀賞に選ばれた門本さんとイノシシの革で作ったパソコンケース

11月18日午後、松山市大手町1丁目



**EGF**  
Ehime Global Frontier  
愛媛から、はじめる

022」(県、えひめ産業振興財団主催)の審査会が18日、松山市大手町1丁目の愛媛新聞社であり、鳥獣害対策で捕まえたイノシシの革製品を販売するプランを提案した愛媛大農学部3年で学生団体「Reianima」代表の門本さん(21)が最優秀賞に輝いた。

県内の高校生や大学生の8組19人が地元の水産物や水、古民家などの地域資源を生かした活性化策をプレゼンテーション。4人の審査員が実行力、企画力、課題解決力、プレゼン力の4項目で審査した。門本さんは県内の鳥獣被害状況を説明。箱わなによる狩猟を経験し「命を奪うのは並大抵のことではないと知った」と振り返った。「県内で捕れたイノシシは肉と異なり、革はほとんどが捨てられる。命の資源に

経済的価値を与えるという理念の実現に向け、一歩一歩進んでいく」と述べた。優秀賞には空き家をコワーキングスペースとするプランを発表した「三崎高橋せんたんプロジェクトキッズ」が選ばれた。門本さんはテクノプラザ愛媛(松山市久米窪田町)で来年2月2日に開催予定の「EGFアワード2021-2022」でプランを発表する。

(西尾寛昭)

大賞	河原部社	山梨県山梨市	（関東・甲信越） 滝科婦人科総合医療センター	群馬県高崎市
特別賞	こまち産物	横浜市中区	（近畿） ヴィンター・リブレ	和歌山県東牟婁郡 広島町三反木
優秀賞	石徹白洋品店	岐阜県岐阜市	（中部・四国） 花巻わさくぞ	福島県福島市
優秀賞	三崎高「せんたん部」	伊方町	（九州・沖縄） でんじん安の会	熊本県熊本
優秀賞	中国・田岡ブロック賞	広島県三次市	九州教員グループ	福岡県八幡市
優秀賞	（東海・北陸） アノミアナー	岐阜県岐阜市	共創アート画	山梨県山梨市
優秀賞	（北陸・東北） ギザギザ湾・美化美化計画	山梨県山梨市	ハラルボニー	香川県高松市
優秀賞	（北陸・東北） ギザギザ湾・美化美化計画	山梨県山梨市	若者育成委員会	山梨県山梨市
優秀賞	（北陸・東北） ギザギザ湾・美化美化計画	山梨県山梨市	ハーモニーネット未来	山梨県山梨市

## 中高生の夢実現後押し



河原部社の活動の中で「アノミアナー」で開かれた中高生に  
企業多職種イベントの開催の様子

「アノミアナー」は、中高生に企業多職種イベントを開催し、夢の実現を後押しする。河原部社は、2021年12月、11社協賛で開催した。このイベントでは、各社の社員が、中高生に企業多職種イベントを開催し、夢の実現を後押しする。河原部社は、2021年12月、11社協賛で開催した。このイベントでは、各社の社員が、中高生に企業多職種イベントを開催し、夢の実現を後押しする。

## 大賞 河原部社

（山梨県山梨市）

河原部社は、2021年12月、11社協賛で開催した。このイベントでは、各社の社員が、中高生に企業多職種イベントを開催し、夢の実現を後押しする。



住居と連携し伊方町のまちおこしに取り組みむ  
三崎高校「せんたん部」のメンバー

三崎高校「せんたん部」は、住居と連携し伊方町のまちおこしに取り組みむ。三崎高校「せんたん部」のメンバーは、住居と連携し伊方町のまちおこしに取り組みむ。三崎高校「せんたん部」のメンバーは、住居と連携し伊方町のまちおこしに取り組みむ。

## まちおこし住民と共に

三崎高校「せんたん部」は、住居と連携し伊方町のまちおこしに取り組みむ。三崎高校「せんたん部」のメンバーは、住居と連携し伊方町のまちおこしに取り組みむ。

## 優秀賞 三崎高「せんたん部」

（伊方町）

三崎高校「せんたん部」は、住居と連携し伊方町のまちおこしに取り組みむ。三崎高校「せんたん部」のメンバーは、住居と連携し伊方町のまちおこしに取り組みむ。

# 世代を超え誇り未来へ

地方新聞紙と共同通信が主催する「第12回地域再生大賞」一采一花なく、みんなで、の各賞が決まった。長引く新型コロナウイルス禍の中、地域を持続・発展させるたくましく、柔軟な取り組みがそろそろ、そして前向きに取り組む人々を守り、未来へ育てる思いも、世代を超えて若い手がつながり、地域の誇り（名）を色濃く刻むは、着実に全国に広がっている。（3面参照）

## 「第12回地域再生大賞」各賞決まる

第12回地域再生大賞の各賞は、共同通信と地方新聞紙が主催する。今年も、新型コロナウイルス禍の中、地域を持続・発展させるたくましく、柔軟な取り組みがそろそろ、そして前向きに取り組む人々を守り、未来へ育てる思いも、世代を超えて若い手がつながり、地域の誇り（名）を色濃く刻むは、着実に全国に広がっている。

## 受賞団体の顔ぶれ SDGs 加味して審査

審査は、SDGs（持続可能な開発目標）を加味して行われる。今年も、新型コロナウイルス禍の中、地域を持続・発展させるたくましく、柔軟な取り組みがそろそろ、そして前向きに取り組む人々を守り、未来へ育てる思いも、世代を超えて若い手がつながり、地域の誇り（名）を色濃く刻むは、着実に全国に広がっている。

## 伝統作業着を全国発信

石徹白洋品店（岐阜県郡上市）

石徹白洋品店は、伝統的な作業着を全国に発信している。この作業着は、地域の伝統を継承し、現代のニーズに合わせて改良されている。



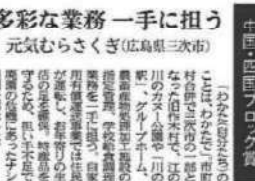
地域の誇りから伝統の作業着  
「たつけ」の作り方を教わるスタッフ

—2021年1月、岐阜県郡上市

## 多彩な業務一手に担う

元氣むらさきぎ（広島県三次市）

元氣むらさきぎは、多彩な業務を一手に担っている。この会社は、地域の産業を支える重要な役割を果たしている。



「わかたけ」のまちおこし  
村おこし隊の一員として

—2021年1月、岐阜県郡上市

2022年1月30日付 愛媛新聞

三崎高「せんたん部」地域再生大賞 優秀賞を受賞  
地方新聞46紙と共同通信が、地域活性化の取り組みを表彰する第12回地域再生大賞の各賞50団体が29日、決まった。大賞（副賞100万円）には、中高生に家庭でも学校でもない第三の居場所を提供する「河原部社（かわらべしや）」（山梨県山梨市）が輝いた。若いスタッフがイベントや職場体験を通して生徒らの夢の実現を応援、地域への愛着を育む。（19面に特集）  
今回は国連の持続可能な開発目標（SDGs）を念頭に「未来へつなぐ、みんな」の副題を設定。取り組みの将来性や「誰も取り残さない」といった観点に注目した。

「ギザギザ湾・美化美化計画」(福井県福井市)に、地球の未来賞兼東海・北陸ブロック賞(10万円)を贈る。  
ブロック賞(各10万円)は次の団体。  
にかほ市商店街振興会(秋田県にかほ市) 北海道・東北産科婦人科縮出(たてはり) 佐藤病院(群馬県高崎市) 関東・甲信越▽ワイダ・リブレ(和歌山県美浜町) 近畿▽元氣むらさきぎ(広島県三次市) 中国・四国▽でんでん虫の会(熊本県) 九州・沖縄  
また次の通り特別賞(各10万円)を選んだ。  
九州教員グループ(長崎県大村市) SDGs企業賞(ハラルボニー(盛岡市)) 共創アート賞(ハーモニーネット未来 岡山県笠岡市) 選考委員長賞  
このほか、伊方町の三崎高校「せんたん部」など各地の38団体が優秀賞に決まった。  
新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ、東京での表彰式開催は見送る。大賞の河原部社の表彰式は山梨日日新聞社が2月18日に予定している。

2022年1月30日付 愛媛新聞

本館全焼の伊方・亀ヶ池温泉

# 再建へ若者アイデア続々

## 三崎高生と大学生 理想像探る



亀ヶ池温泉の再建についてオンラインで大学生らと意見交換する三崎高校生

昨年8月に本館が全焼した伊方町健康交流施設「亀ヶ池温泉」(同町二見)の再建について、三崎高校の生徒と地元出身の大学生がこ

のほど、オンラインでグループディスカッションした。「写真映えるスポットが必要」「地元ならではの体験スペースがほしい」など若者らしい自由な意見を交換。今後、町

の再建検討委員会に提案する。住民に愛された温泉の再建を応援しようと町と連携協定を結ぶ愛媛大が企画。三崎高1〜3年生9人と愛媛大、松山大などの学生8人が5日、3班に分

かれて議論した。町職員や設計業者も視聴した。

三崎高3年谷本賢信さん(18)、1年の成本奏さん(16)と島本彩音さん(16)のグループは大学生に導かれながら火災前の施設の課題を出し合い、再建後の理想像を探った。

3人はアクセス道路が分かりにくく、温泉以外の体験型の楽しみが少なかったと指摘。「道をライトアップしてほしい」「三崎高生が漂着アイに色を塗って作っているアートを来客に体験してもらい、作品を道に並べてはどうか」などアイデアを示した。

町は再建について昨年9月から住民代表らによる検討委で議論している。温泉は4月1日の仮営業再開を予定している。

(今西晋)

2022年2月11日付 愛媛新聞

地域再生大賞優秀賞を受賞した三崎高校「せんたん部」の部員。18日午後、松山市大手町1丁目。



### 地域再生大賞 三崎高に優秀賞贈る 松山で「町への誇り受賞に」 伝達式

地域に活気を与える団体「生大賞」の表彰状伝達式が、18日、松山市大手町1丁目の愛媛新聞社であり、優秀賞に選ばれた三崎高校「せんたん部」（伊方町三崎）に表彰状などが贈られた。

地域再生大賞は愛媛新聞など地方新聞46紙と共同通信でつくる実行委員会が主催。都道府県ごとに地域貢献に取り組みNPO法人や企業など1、2団体を推薦し、計50団体が各賞を受賞した。

三崎高校「せんたん部」は2017年度に発足。3年生5人を中心に過疎化が進む地域と連携して、イベントや商品開発といったまちおこしに取り組んだ。活動は、分校化の危機にあった同校の魅力を顕出し、入学者数の増加にもつながっている。

伝達式では、愛媛新聞社の土居英雄社長が表彰状と

盾を手渡した。盾を受け取った大西友海さん（18）は3年。伊方町全体が三崎高校を応援してくれた。活動を通じて地域の人と関わること、生徒が伊方町を誇りに思う気持ちを持てたことが受賞につながったと喜んだ。

（尾上芽吹）

3年生部員は卒業を控えている。その一人、農田晃佑さん（17）は「後輩には、感謝を忘れず、常に地域の課題に目を向け、できることをひとつずつ続けていくことを伝えたい」と力を込めた。



# 活動成果 見て触れて

## 地域団体 八幡浜で交流発表会

南予の地域活動団体の交流発表会が13日、八幡浜市沖新田のみなと交流館であり、町おこしに取り組み学校や音楽に親しむ住民グループなどが活動報告の発表や体験会を催して市民と交流した。

新型コロナウイルスの影響で制限される市民活動の

2020年夏に発足した

歌三味線グループ「八幡浜

むりかぶし」は、沖繩民謡

の弾き歌いで軽やかな音色

を披露。三崎高校(伊方町)



地域活動団体との交流で沖繩三線を体験する親子連れ

## 三味線やブイアート披露

せんたん部は海岸漂流物に絵を描く「ブイアート」や地元伝統の織物「裂織り」を使ったバッグやシシュなどの商品開発の取り組みを紹介した。

体験会では来場者が各団体から手ほどきを受け、活動の一端に触れた。三崎高生による裂織り体験が楽しかったという八幡浜市八代中一年大森裕季さん(13)は「想像より簡単にできたし、隣の伊方町の伝統だと初めて知り勉強にもなった」と振り返った。

「八幡浜むりかぶし」の会員の上杉友子さん(50)は「直接楽器に触れてもらい、興味を持ってもらえよかった」と話していた。

(門屋駿介)



三崎高校の生徒(左)と二階に海岸漂着「みに」絵を描く「ブイアート」を楽しむ参加者

2 事業案内ポスター



### 3 カリキュラム開発専門家報告書

令和4年3月14日  
カリキュラム開発専門員 黒川信義

#### 令和3年度未咲輝学実績報告

#### 実施内容

##### 1 オリエンテーション

[令和3年6月10日 11R:10時55分～11時45分、12R:11時55分～12時45分]

○自己紹介、授業概要の説明、アンケートを実施

《授業概要の説明》

① 基本的にフィールドワークや実習に重点を置き、佐田岬半島の地形・地質を土台として歴史・文化などからそこに暮らす人々の暮らしを感じてもらいたい。

② 暮らしの原点に返って今の生活を見直してみると、新しい発見があるかもしれない。

たとえば、スマホという身近なIT機器を手軽に使用できる今日、電気やガスを使わない時代の生活から「暮らしの原点」を感じてもらいたい。

(添付資料:アンケート結果(令和3年6月10日実施)、アンケート結果概要(6月実施))

##### 2 講義「光と暮らし今昔」

[6月24日 11R:14時45分～15時35分、12R:15時45分～16時35分]

電気やガスがないのが当たり前の時代を知り、過去の人々の暮らしがどのように変化を遂げてきたかなどパワーポイントにより説明した。第2時世界大戦中、実際に使用していた「灯火管制ランプ」を点灯、また、手回し蓄音機をならしてSPレコードとLPレコードを聴き比べその時代の変化を体感してもらった。

生徒らは、手回し蓄音機を見るのも音を聞くのも初めての経験であり、「音がでる仕組み」に興味をもつ生徒も少なくなかった。

休憩時間内に11Rから12Rへ移動することとなったが、機材準備に時間がかかった。

(添付資料:光と暮らし今昔)

##### 3 講義「海の道・陸の道と赤坂坊山石塔群」

[9月30日 14時45分～16時35分]

佐田岬半島(特に三崎地区)から望む豊予海峡『速吸之門』は、古代の瀬戸内海と宇和海を結ぶルートでもあり、三崎地区が、中世以降の海上交通の要所として繁栄していたことを理解してもらうことを目的とし、パワーポイントと石塔に使われた石材のサンプルを用いて説明した。

石塔群は、その石材から瀬戸内海沿岸地域や九州などから運び込まれたものであることがわかることを説明した。さらに7種類の石材からなる100基ほどの石塔が、1ヶ所に集中しているのは日本でも極めて珍しく郷土の貴重な文化財であることを付け加えた。

また、石材サンプルを手にとり磁石で「つくつかないか」などを試み、次回予定の見学実習に備えた。

(添付:海の道・陸の道と赤坂坊山石塔群)

#### 4 文化財見学「赤坂坊山石塔群およびあこう樹」

[11月4日 14時45分～16時35分]



瀬戸内海沿岸や九州などから運ばれてきた石塔であることを理解するため、前回授業で学んだ石塔表面の目視観察および磁石を近づけ「よくつく」「僅かにつく」「つかない」などから石材判定を行って石材産地を推定した。

見学実習は、3人一組のグループに別れそれぞれ相談しながら石材の判別を行ったが、限られた時間内で行うため、全員に対し十分に指導することは難しかった。特に、磁石の僅かなつき具合など微妙な差を見極めるのは難しかったようである。終了後に答え合わせを行った結果は、正解率は約60%程度であったが、生徒らは、石材の判別を目視だけでなく磁石でも行えることを知り、三崎地区が中世海上交通の要所であったことを感じてもらえたと思われる。

あこう樹は、大正10年に四国で初めて国の天然記念物に指定され、巨樹としてまとまって生育していることや北限地であることなど学術的に評価されていることなどを説明した。

(添付資料：赤坂坊山石塔群の石材調査資料、赤坂坊山石塔群における岩石のみかた)

#### 5 実習「絵の具拓本」

[令和4年1月27日 14時45分～16時35分]



石や金属にかかれた銘文を解読するなど文化財調査に欠かせない拓本技術の基本を実習した。史料に基づき中庭で説明をしたのち、機材（タンポ）作成にとりかかった。実習行程の全てを2時間で行うため、今年度は2人一組で構内のマンホールを使った拓本実習とした。タンポ制作や細かい柄をうまく写し取る技術など一人ひとりに十分指導する事が出来なかったが、生徒らは、初めての経験でもあり「柄を写し取る」ことに満足していたようだった。（添付資料：拓本実習のてびき）

## 6 見学「町見郷土館」、講義「佐田岬半島の岩石と地質」

[令和4年2月17日 13時45分～16時35分]

三机須賀の森を見学予定だったが、天候の関係で町見郷土館の見学となった。

11R、12Rに別れ、町見郷土館の展示内容の説明を受け、民具など直接手に触れるなど郷土における生活を体験させることが出来た。

2階の教室では、佐田岬半島の岩石と地質についてパワーポイントによる講義を行い、佐田岬半島で収集した岩石サンプルを手にとって確認するなど佐田岬半島の地質を感じてもらった。

（添付資料：佐田岬半島の岩石と地質）



## 7 須賀の森見学

[3月9日 14時20分～16時]



11R、12R合同で実施した。

愛媛県指定天然記念物「須賀の森」は、机湾入口から伸びた砂嘴の上あり、まず、「須賀の森」に入る前に砂嘴のでき方や、入口に置かれて石碑（注連柱：しめばしら）によってここから奥が聖域であることを説明した。

須賀の森に入り、真珠湾攻撃で命を落とした「九軍神」や近年江戸時代から謎となっていた鬼面が発見されたことなどを説明した。さらに三机湾などを見渡し見学を終了した。

なお、片道40分程度の移動時間を考慮しなければならないため、見学時間は20分程度の短い時間とせざるを得なかった。

（添付資料：須賀の森はどうできたか、三机湊）

## 【課題】

未咲輝学は、ブーメラン人材育成の一助となることを念頭にカリキュラムを策定してきた。佐田岬半島は、他の地域にない独特な場所であり、そこに生態系が育み人々の暮らしや文化があることから、フィールドワークや実習に軸足を置いた。

実施に当たり幾つかの課題が浮き彫りになったため以下に示す。

### 1 移動時間について

瀬戸地区、伊方地区などへの移動する場合、昇降時間も含めると片道 40 分程度必要である。このため、2 時間の行程では、実質の見学時間を 30 分以内としなければならない。

### 2 見学場所について

佐田岬半島の道路は、幹線から外れると大型車の運行が困難で駐車場の確保も難しくなるため見学場所が限定される。

### 3 時間配分について

フィールドワークや実習を行うに当たり、説明等を事前に行っておく必要がある。事前説明は、フィールドワークや実習の直前に実施するのが望ましい。

また、自発的な質問、意見、感想などを述べてもらう時間を充分にとることが必要である。

### 4 資料準備について

教室での授業は、パワーポイントを使用したがる、映像が消えるので記憶に残りづらい。このため、要約した資料を作成しパワーポイントと併用する必要がある。

### 5 雨天時等の対応

悪天候時でも見学ができるような場所を確保して臨機応変な対応ができるようにしておく必要がある。ビジターズハウス、町見郷土館などは、その代替見学場所として確保しておきたい。

### 6 実習機材の準備について

拓本実習では布片・化繊綿・絵の具・画仙紙などを、赤坂坊山石塔群見学の事前説明では石材サンプルを、佐田岬半島の岩石と地質では岩石標本を用意した。今後、これら授業を継続する可能性および準備品の要否についても検討することが望ましい。

### 7 佐田岬みつけ隊への入隊を推奨

上述のようにクラス全員によるフィールドワークには限界があるため、希望者など少人数に絞り活動することが望ましい。

## 【その他】

### 地歴部活動

未咲輝学遠行において直面した課題解決のため、サークル活動を立ち上げ、佐田岬みつけ隊（町見郷土館サポーター）のメンバーのサポートを受けながら活動を継続していくこととした。

今年度は、2 年生 5 人が地歴部を立ち上げ、佐田岬みつけ隊に入隊して地域の人たちとの交流を深めながら、伊方町の地質・文化・歴史などを体感した。

（添付資料：地歴部の活動）

以上

## アンケート結果（令和3年6月10日実施）

アンケートは、生徒がどのような生活環境で、どのような希望を描いているかなどを知ることを目的に、3項目の簡単な質問を無記名で回答を求めた。

### 《質問内容》

- a あなたの郷土を自慢してください。
- b 50～100年後の日本、あなたの郷土は、どのように変わっていると思いますか（希望でよい）。
- c 興味あるものは？ [海, 山などの自然、文化財, 考古学、電気, 機械, I T関係、土木建築、農業・漁業、観光サービス業、芸術、その他]

### 《とりまとめ：別紙》

各質問に対する回答を図1, 2, 3に集計し、それぞれの項目から読みとれる傾向を①、②。

③、④にまとめた。概要は以下のとおりである。

#### ① 自然環境の重要性を感じている

「自然環境」については、図1、2、3とも最上位にあり、多くの生徒が重視している項目である。

[今後の取組] →自然環境の保護はもちろん、自然の恵みをどのように感じ、佐田岬半島に暮らす人々が、「暮らしの中」にどう活かしてきたかなど問題意識を持てるようになるとうい。

#### ② 地域社会・産業の注目度が高く期待感がある

図1では特産品、農業、漁業に関することは下位にあるが、図2では上位にきており注目度が高いことを示している。

[今後の取り組み] →『地域のブランド化』、『他地域との差別化』などをキーワードに、伊方町固有の環境を活かした産業を盛り上げたい。

#### ③ 将来、情報化が進む一方で少子化も進む

人口問題（少子高齢化）は、避けられない問題だと感じている。各分野での技術革新がなされ情報化社会が進むと考えているようだが、電気、機械、I T関係に対する興味は薄いようだ。

[今後の取り組み] →理科離れ、科学離れに向かわないよう、科学の歴史を学ぶなど原点に立った物作りに注目してもらいたい。

#### ④ 文化芸術の注目度が低くなると感じている

「文化芸術・文化財」などは、地域資源であると感じてはいるものの将来的な活用方法など現実的なものとしての実感はいようである。

[今後の取組] →関係する地域イベント・サークル活動への参加、保護活動の推進、または先進地の良好事例の紹介も必要と考えられる。また、身近な文化財等を見てもらい、それらの価値や必要性をわかりやすく説いていきたい。

以上

# アンケート結果概要 (6月実施)

- ① 自然環境の重要性を感じている
- ② 地域社会・産業の注目度が高く期待感がある
- ③ 将来、情報化が進む一方で少子化も進む
- ④ 文化芸術の注目度が低く感じている

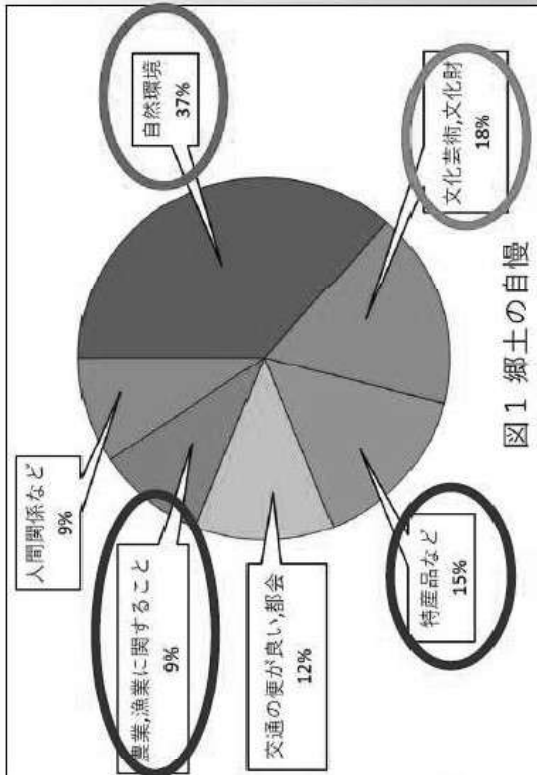


図1 郷土の自慢

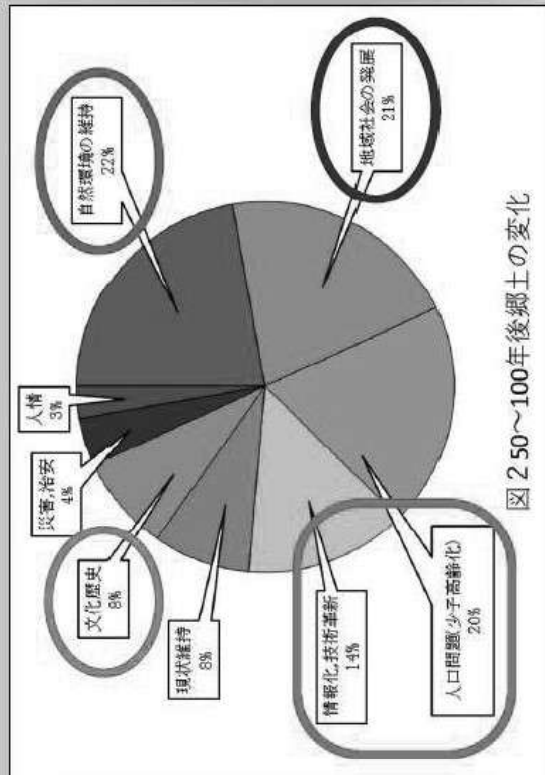


図2 50~100年後郷土の変化

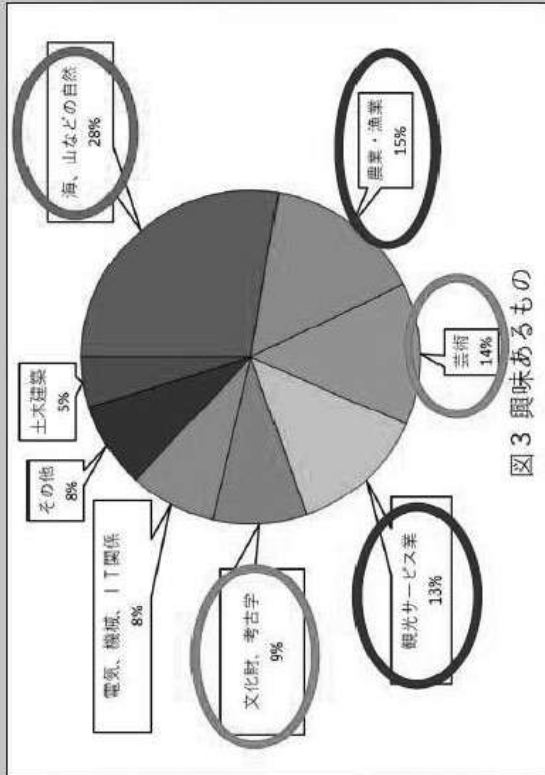


図3 興味あるもの



(添付資料 アンケート集計表)

● 50～100年後の日本、あなたの郷土はどのように変わっていると思うか（希望でも良い）

自然環境の維持	木がなくなる
	遊べる場所が増えてほしい
	綺麗な自然は変わらず残っていてほしい
	畑が減っている。人も減っている
	郷土の自然は減っているかも知れない
	地球温暖化がすすむ
	木造の家が増える
	木が増える
	ミカンや魚が美味しい
	人口減少となっても自然が今と変わらず残って欲しい
	郷土と自然が残って欲しい
	ソーラパネルを田圃などに設置して欲しくない
	自然を残したい
	気温の上昇が顕著になる
自然を残したい	
自然を大切にしたい	
地域社会の発展	お店が増えている
	人が増えている
	社会が発展している
	もっと都会になる
	子供が沢山いる
	都会化が進んでいる
	都市化が進んでいる
	便利になってほしいが、変わりすぎないでほしい
	すぐ近くにコンビニがほしい
	遊べる場所が増えてほしい
	「未来」らしくなってほしい
	地域活性化が進んでいる
	経済発展している
	頻繁に車が往来するような活気のある街になっている
人口が増えコンビニなど手軽に買い物ができる場所が増えて欲しい	
人口問題	高齢化が進んでほとんど老人しかいない街になる
	過疎化は止まってほしい
	子供が増えてほしい
	畑が減っている。人も減っている
	人口減少
	人口減少となっても自然が今と変わらず残って欲しい
・ 高齢者の過ごしやすい街を期待	



1



2



3



4



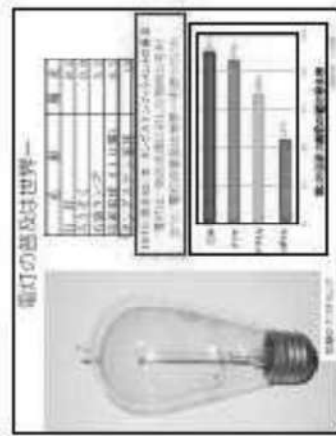
5



6



7



8



9